

〔研究領域〕 II 教育課程

第4分科会 知性・創造性

〔研究課題〕 知性・創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

〔視点〕

①これからの社会を生き抜くための学力を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

提案者 さいたま市立常盤北小学校長 永 嶋 和 実

1 はじめに

これからの知識基盤社会では、生きる力を支える確かな学力、豊かな心、健やかな体、人とのかかわり合いを身に付けることが必要である。

さいたま市では、「社会を生き抜く力と希望をはぐくむ教育の推進」を掲げ、「社会の変化や予想外の事態を乗り越え、主体的に未来を切り拓いていく力をはぐくむ教育」を展開している。その際、教育課程を編成・実施するため、学校教育の指針を次の4点としている。

- 1 確かな学力をはぐくみ、個性を生かす教育の推進
- 2 豊かな心と健やかな体をはぐくむ教育の推進
- 3 豊かなかかわり合いを大切にする教育の推進
- 4 地域に根ざした信頼される学校づくりの推進

本研究は、その趣旨を踏まえ、学校教育目標の実現に向けて、教育課程を編成し実践していく。

〈学校教育目標〉・美しさを感じる子
・よく学ぶ子
・元気に運動する子
・がんばりぬく子

2 本校の概要

本校は、オープンスペースの学校として、また、校舎内側には吹き抜けがあり、開校当初より各教科等の研究や生活指導に力を注いでいる。現在、学級数13（内特別支援学級1）、開校26年目の学校である。子どもたちは素直で自己肯定感が高い。学力も高く、「全国学力学習状況調査」や「さいたま市学習状況調査」では、常に国や市の平均を上回っている。保護者の教育に対する関心は高く、地域も環境整備や学習支援に協力的である。

3 研究の概要

（1）研究のねらい（目的）

子どもたちが主体的に学習する態度を育成するためには、基礎・基本となる知識や技能を活用し、自ら変化へ対応する思考力、判断力、表現力、自他の尊重、協働する力、想像力などを身に付け課題を解決することが必要である。そこに社会を生き抜くための学力が生まれると考える。

（2）研究の方法（課題：視点①②③）

子どもたちのよりよい成長を目指し、教育課程の編成・実施・評価・改善にあたっての課題を次の3つの視点とし、研究を進めることとした。

視点① 基礎・基本となる知識や技能の定着を図り、確かな学力をはぐくむ。

視点② 社会の変化へ対応するための豊かな人間性や健康・体力をはぐくむ。

視点③ 社会の変化に対応するための基本的生活習慣、社会性や社会的な行動力をはぐくむ。

（3）研究の内容（各課題に対する取組）

〈視点①に対する取組〉

子ども一人ひとりに確かな学力を保障するため、校長が経営ビジョンを明示し、教育課程を編成・実施・評価・改善するよう取り組ませた。

その中で、基礎・基本の定着のための年間指導計画や全体計画に、学習形態の工夫や評価方法等を位置付け、計画的、系統的に知識注入型や画一的指導方法・指導形態から、子どもがじっくり考えたり、作業したりする授業の重点化を図った。

また、市教育委員会委嘱の「小・中一貫教育」の国語科、「国語力向上」での国語科を中心に据え、研修を進める体制を整えた。

特に、「小・中一貫教育」では、中学校区の目指す児童・生徒像を設定し、研修を進めた。「国語力向上」でも国語科を中心として、「伝え合う力」を中心に研究を深め、他教科に結び付くようにした。

その際、日常の授業でも、市の「よい授業（よい授業とは、児童の意欲を高め、学力をつける）」の4つの因子（1 授業マネジメント、2 基礎アップ、3 授業スキル、4 アクティブ・ラーニング）を生かし、学習活動を展開した。

その発展として、自学自習の場として、アクティブ・ラーニングコーナーを作った。子どもたちが休み時間を利用し、その場に置いてあるプリントを自己選択し、個人で、又は友達同士で、ときには、スクールアシスタント等が指導し、課題を解決し合う場である。

これらの様々な取組から、試行錯誤や繰り返しを大切に
した学習を実施し、質の高い授業を展開し、子どもたちの
学びの広がりや深まりにかかわる多様な学習活動を行うこ
とができた。

アクティブ・ラーニングコーナーは子どもたちにとって
も学習の行い易い場として認知されてきている。

さらに確かな学力を身に付けるため、授業と体験活動(校
外学習等)を計画的に関連付け実践し、指導内容を整理・
統合・深化させ、横断的・関連的・総合的に見ながら、確
かな学力をはぐくんでいきたい。

〈視点②に対する取組〉

道徳や体育、総合的な学習を中心として、豊かな人間性
や健康・体力をはぐくむことを目指し指導計画を見直した。

その際、手作り感や体感等の体験や事実認識に基づき、
実生活とつながる学習を展開し、感性をはぐくむ授業を工
夫し、実践した。

「擬似赤ちゃん抱っこ体験」や動植物を育てる各種行事
等での活動を中心に、他人の喜びや悲しみを共有するなど、
人として心の在り方を身に付けていった。



助産師と担任による
性教育

また、市の体力向上サポートプランを活用し、体力アッ
プキャンペーンの中の「にぎなげプロジェクト」「なわと
びチャレンジ」などを実践した。

さらに、食育に関する学習を発達段階に応じて計画的・
系統的に取り組み、給食の時間だけでなく家庭科での授業
の充実や、保護者への啓発など行った。

豊かな人間性や健康・体力をはぐくむために、学んだこ
とを活用する場面を意図的に設定し、学んだままにしない
単元構成を工夫したことにより、成果が上がっている。

教科だけでなく、食育や体力向上策も指導計画や経営ビ
ジョンに位置付けるだけでなく、価値付け、実践に取り組
むことが肝要である。

〈視点③に対する取組〉

子どもの個性を伸ばし、社会性などを育てる場合は、学校
だけでなく、学校が家庭や地域と連携し、地域の教育力を
授業の中や活動の場で取り入れ活用する工夫が必要であ
る。地域全体をフィールドとした指導計画を作成するよう
に努めた。

例えば、公民館講座の出前授業や中学校との交流等の中
で選択的経験を多く取り入れ、「正しく学ぶことに失敗し
ても、よい経験として後で生かす」ように、やり直しの機
会を設定していく。

そこで、基本的な生活習慣、社会的マナー、社会的行動
力を醸成するようにした。具体的には、学ぶ意欲を醸成す
る学習意欲、学習習慣、情報リテラシーなどを推進するた
め、協働共励の場として朝の挨拶運動、学級ペア活動、清
掃活動、縦割り活動、学校行事等を活用していった。

さらに、学校で目指す、運動習慣、生活習慣、食習慣を
確立するため、「目指す保護者像」や「目指す児童像」を
明示し、家庭に啓発し、それを学校評議員会や参観日や懇
談会、学校評価等で生かした。

今後も、学校運営に有効な家庭や地域の声が届く体制づ
くり努めていく。

4 研究のまとめ〈成果と課題〉

- (1) 「よい授業」の4つの因子を活用したことにより、
個に応じた指導の徹底が図られ、確かな学力の向上
に結び付いている。
- (2) 豊かな人間性や健康・体力の育成では、様々な体
験や活動を意図的・計画的に設定し、経験を積み重
ねていく手立てが有効である。
- (3) 基本的な生活習慣・社会的行動力などは学校だけで
なく、家庭・地域・行政と連携してはぐくむことが
広い視点から必要である。
- (4) 教育課程を編成する上で、子どもや学校等の実態
に依拠するには、教師の主体性や力量が大きく影響す
る。しかし学校力だけでなく、家庭や地域の声を生
かし、評価・改善につなげることも必要である。

さらに、これらのことが、学校教育目標の具現化に結び
付けるように工夫していく。

5 終わりに

これからの社会を生き抜くための学力を育む教育課程の
編成・実施・評価・改善の循環機能を、有効に活用してい
けるよう、自校の教育課程を再度見直し、校長がリーダ
ーシップを発揮し、新たな教育課程の実現に向け今後も取
組んでいく。

〔研究領域〕 II 教育課程

第4分科会 知性・創造性

〔研究課題〕 知性・創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

〔視点〕

②共に生きる知恵を磨き、高め合う教育活動の創造・推進

提案者 飯能市立飯能第二小学校長 齋 藤 健

1 はじめに

我が国は世界に例をみないスピードで高齢化社会を迎え、様々な課題に直面している。特に少子化による人口減少は飯能市においても大きな問題となっている。小学校14校中、4校に複式学級があり、今後更に増えていくことが予想される。また、社会のグローバル化や情報化の中、コミュニケーション不足による人間関係の希薄化や経済格差の固定化、貧困家庭の増加等も大きな課題となっている。学校は、これらの課題に対してどう対処していくのかが問われているが、特効薬はない。そこで、地域の自然や歴史・文化を生かした豊かな体験活動、様々な人々との交流を通して、生きる力、豊かな人間性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善を着実に進め、これからの時代を背負って立つ人材の育成を進めていくことが学校教育の使命であるとする。

2 飯能市の教育

飯能市では、「共育」を合い言葉に「共に学び、未来を拓く、人づくり」を基本理念に掲げ、「飯能を愛し、夢や希望をもち、明るく元気に学び実践する人づくり」を教育目標にし、飯能市教育振興基本計画（第二次）を策定し、施策を推進している。その中の、「確かな学力を育む教育の充実」では、「K4KID宣言」をスローガンにしている。「K4」とは、よりよい授業を行っていくための4つの視点「課題・活動・確認・価値付け」を示したもので、普段の授業にK4の視点を取り入れることによって、授業改善を図り、児童生徒の学ぶ意欲の向上、学力向上に繋げていくものがある。

また、「KID」は、「家庭学習（K）・挨拶（I）・読書（D）」を表し、家庭と連携して学力向上等を目指している。

3 本校の概要

本校は、明治6年に開校し、今年度で143年目を迎える。児童数66名、6学級、県費負担教職員12名の小規

模校である。飯能市街より西に5km程入った山間部に位置し、地域・保護者は、学校への協力を惜しまない。

4 本校の課題

本校の児童は、小集団で6年間過ごす。そのため、

- ①人間関係が固定化し、学校が活性化しない。
- ②中学校に進学した際、クラスの中に本校出身者は2～3名で、他校の出身者に圧倒され中学校生活に適応出来ない子もいる。

5 課題解決に向けた教育課程の編成

- (1) 異年齢集団での活動を増やす
- (2) 地域の方や中学生・高校生との交流
- (3) 協働・体験を重視した学習活動

6 協働・体験を重視した学習活動

(1) 学習林活用教育

飯能市では、全小中学校で学習林活用教育を教育課程に位置づけ実施している。小学校では3年生の社会科の授業で、西川材について学び、学習林において、間伐体験等を行っている。



(2) ホッケー教室

飯能市は「ホッケーの街」でもあり、全小中学校の教育課程にホッケー教室が位置づけられている。用具の準備や指導者の派遣等は全て教育委員会が行ってくれる。市内のホッケー場では毎年、各種ホッケー大会が開催されており、今年度は8月に全国スポーツ少年団交流大会が行われた。



(3) 華道・茶道体験

本校では、3・4年生が華道を、5・6年生が茶道を地域の公民館サークルの方に、総合的な学習の時間に指導していただいている。礼儀作法を大切にする日本の伝統文化に触れる体験活動である。



(4) 自然体験活動

本校では入間川での川遊びをはじめ、虫とり、ザリガニとり、地層・河原の石の観察等様々な自然体験学習を行える環境が身近にある。



(2) 飯能市立南高麗小学校の取組

① 横田基地メンデル小学校との交流

米軍横田基地内のメンデル小学校の児童と交流し、英語が通じた、分かった喜びを感じさせる取組を毎年実施している。

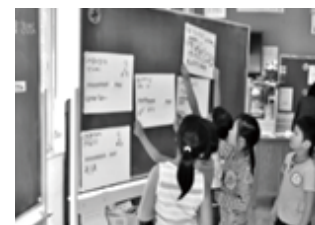
② 青梅市立成木小学校との交流

都県境に位置する両校は、毎年交流会を開催している。東京都と埼玉県の特徴を伝え合う活動を通して、地域に対する理解や愛着を深めるとともに、表現力を高めている。



(3) 複式学級での取組

飯能市立名栗小、吾野小、東吾野小、西川小の4校には、複式学級がある。飯能市は複式教育の推進を重点施策に位置づけ、授業方法等について研究を行っている。



7 他校の取組の事例

(1) 飯能市立富士見小学校の取組

テーマ「聴き合い 学び合う子供の育成」

① 「聴き合い、学び合う」授業

児童が主体的・協働的に学び、学力向上を図るとともに、自尊感情を高める。

② 学習形態の工夫

個人、ペア、グループ、一斉等、学習形態を使い分けることで、意欲を高める。学習に合わせた隊形を準備することで一人一人の学びを保障していく。



8 まとめ

学校には、基礎的な知識・技能の習得のみならず、個々の能力や特性に応じた学び、子どもたち同士の学び合いや学校内外の人々との協働や多様な体験を重視した課題探究型の学習等、新たな学習の在り方が求められている。

私達は、子どもたちが共に生きる知恵を磨き、高め合うことのできる質の高い教育活動を創造・推進し、しなやかな知性や豊かな創造性を育み、21世紀をたくましく生き抜く子どもたちを育てて行かなければならない。そのためには知性・創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善を着実に進めて行くことが重要である。

〔研究領域〕 II 教育課程

第5分科会 豊かな人間性

〔研究課題〕豊かな人間性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

〔視点〕

①豊かな心を育む道德教育の推進

提案者 新座市立栗原小学校長 梅 田 竜 平

1 はじめに

国立社会保障・人口問題研究所によると、我が国の総人口は平成60年には1億人を割り、平成72年には生産年齢人口が50.9%、高齢化率39.9%になることが見込まれる。そして現在、65歳以上の人1人を現役世代(20～64歳)2.4人で支えているのに対し、平成62年には65歳以上の人1人を現役世代1.2人で支えなければならなくなるという。

このように、人口減少と少子高齢化が急速に進展する今、学校教育には子供たちに共生社会を生きていく力を付けることが求められている。「自分もよくてみんなもよい社会」を築いていくためには、自らを律しつつ、他人を思いやる心などの豊かな人間性が欠かせない。

新座市では、新座市教育大綱の基本理念を「はぐくもう豊かな心～だれもが自分らしく幸せに生きるために～」として、基本目標の1つに「心豊かで健全な青少年の育成の推進」を掲げている。

本校においても、全教育活動をとおして、規範意識や自尊感情を高め、子供たちが夢や目標に向かってたくましく生きることができるよう、自立心と社会参画への意欲・態度を育んでいきたい。

2 本校の概要

本校は、開校39年目を迎える、児童数401名、12学級の学校である。児童は素直で、落ち着いて学習に取り組んでいる。

学区は新座市の南に位置し、東京都の東久留米市、西東京市に隣接している。保護者の多くは都内に通勤し教育に対する考え方は様々であるが、地域の方々を含め、本校の教育活動に協力的である。

本校は、開校以来、市教育委員会の研究委嘱を絶えることなく受けている。昨年度までの6年間は国語を中心に研究を深めてきた。本年度からは特別活動を中心として「主体的に学ぶ児童の育成」を目指している。教員は若く、経験の浅い者が多いが、教育活動に熱心に取り組んでいる。

3 豊かな心を育むための柱

本校の学校教育目標は、「よく考え学ぶ子 心のゆたかな子 たくましい子」である。

目指す学校像としては、「活気と潤いのある学校」を掲げ、

本年度の重点として「きれいな教育環境」で、「明るいあいさつと返事」が交わされ、児童も教師も「元気に登校できる学校」とした。

この重点をもとに、豊かな心を育むため、道德教育を推進する柱として次の4点を立てた。

- (1) あいさつと返事を徹底する。
- (2) きれいな教育環境をつくる。
- (3) 本に触れ合う機会を設ける。
- (4) 道德の時間及び特別活動の充実を図る。

これらのことを、できる限り保護者・地域の教育力を活用しながら、進めていきたい。

4 取組の実際

- (1) 共生社会の基本技能である「あいさつ」の徹底

① 校長講話等による児童への直接指導

昨年度は「あいさつは気持ちがいから行いましょう」という観点から話をしてきたが、なかなか成果が上がらなかった。

そこで、本年度から「あいさつは共生社会における礼儀の基本である」とし、4月始業式、入学式、5月朝会講話、7月学校だより等あらゆる機会を活用し児童・教職員に示している。あいさつは人間関係を円滑にするために身に付けなければならない技術としたことで、意識に変化が表れている。

② 地域の方々とともに行う「あいさつ運動」

あいさつの徹底には、本校の所属する中学校区をあげて取り組んでいる。

毎月第1水曜日の登校時に、保護者・地域の方々の参加による「あいさつ運動」を実施している。

③ 児童会による「あいさつ運動」

代表委員会の話し合いにより、6月の最終週に運営委員・代表委員の児童が校門に立ち、「あいさ



つ運動」を実施した。

実施後の反省をもとに、次の実践が見込まれる。児童が主体となり、課題意識が生まれたことが大きい。

(2) きれいな教育環境づくり

① 「もくもく清掃」の見直し

本校では、無言で清掃に取り組んでいる。しかし、黙って掃除をしているが、きれいにする意識が弱いのが現状である。前年度末に、清掃分担場所の見直し、清掃用具の使い方・清掃の仕方の改善を清掃主任に指示した。

② 掲示教育の充実

本校の廊下には、世界の名画が飾られている。あわせて、年間を通して児童の絵画作品を階段に掲示している。



また、これまでの国語研究の取組から「ことばのひろば」を設置し、コンテストの実施や児童の作品展示をすることで、情操教育の一環としている。



③ 花壇等の充実

学校応援団の一つとして、環境応援団が組織されており、四季折々の草花を整備していただいている。

また、本市では市が畑を借り上げ、学校農園に取り組んでいる。植物や野菜を育てることをとおして、児童の心を耕している。

(3) 読書の奨励

① 学校応援団による活動

木曜日の業前活動として、朝読書に取り組んでいる。その中で月に1度、読み聞かせ応援団による活動を行っている。



また、図書館の掲示物を担当する図書館応援団があり、季節に応じて児童が本に親しむことができるよう、環境整備を行っている。



② 必読図書の勧め

本市では、市内教員による低・中・高学年別必読図書を選定している。それぞれの学年の図書を全て読み終え、市で配置されている図書整理員から、賞状が渡される。読書を生活目標に組み入れ、委員会活動を活発にすることで、本校は市内でも本の貸出率の高

い学校となっている。

(4) 道徳の時間及び学級活動の充実

① 道徳の時間の管理職による指導

小学校では、平成30年度から「特別の教科 道徳」が実施される。「考え、議論する」道徳に転換を図り、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲を育てるためにはどのように授業を行えばよいのか、全教員の45分間の教室訪問をとおして、指導助言を行っている。

② 学級活動の研究

本年度から課題研究として「主体的に学ぶ児童の育成」を目指し、特別活動を取り上げている。研究の1年目は、学級活動の話し合い活動に視点を当てた。まずは、自分たちの生活をよりよくするために、「みんなで話し合い、みんなで決めたことを、みんなで実践する」ことをとおして、児童一人一人に自己有用感に裏打ちされた自尊感情をもたせ、学級の生活づくりに主体的に参画する態度を育てたい。

また、道徳的实践のための重要な学習活動の場としていきたい。

現在、児童会集会活動、学年集会においても教員の意識が変わり、児童が主体となる活動に変わりつつある。

5 おわりに

本市学校評価システム自己評価（中間評価）では、昨年度の本評価に比べ、次のような結果が出ている。

○本校独自評価項目	※最大4ポイント
・あいさつ、返事	3.29（本評価 3.04）
・きれいな教育環境	3.24（本評価 3.25）
○市統一評価項目「豊かな心の育成」	
・あいさつや言葉遣い	3.43（本評価 3.18）
・互いのよさの認め合い	3.30（本評価 3.31）

あいさつには一定の成果が見られるが、まだまだ評価は低い。本評価では、保護者アンケート等も含め、成果と課題についてまとめた。

豊かな心は、「あいさつ」や「きれいな環境」など、共生社会を築く基礎がしっかりと身に付いた上に育つものとする。今後も日常的にあいさつ・返事の徹底、環境づくりに努めるとともに、道徳の時間、特別活動の研究・実践をとおして、自己の生き方を考え、自立した一人の人間として他者とともによりよく生きようとする豊かな心を児童に育んでいきたい。

〔研究領域〕 II 教育課程

第5分科会 豊かな人間性

〔研究課題〕豊かな人間性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

〔視点〕

②心結ぶ未来社会をつくる人権教育の推進

提案者 熊谷市立秦小学校長 白 川 公 一

1 はじめに

グローバル化は、私たちの社会に多様性をもたらし、急速な情報化や技術改革は、人間生活を質的にも変化させている。こうした社会的変化の影響が、社会生活のあらゆる領域に及んできている。国内では人間関係の希薄化、国外においては国際的な緊張感が漂うなど先行きの不透明感や閉塞感が強まってきている。

こうした社会を生きる子どもたちには、生命を大切にするとともに、自他の人格を尊重し、人と調和して他者の痛みや思いに共感するといった豊かな人間性がより求められている。そこで、豊かな人間性の育成の中心となるのが心の教育であり、人権教育の推進はその基盤となるものである。

2 本校の概要

本校は、熊谷市北部の東端に位置し、北は利根川を挟んで群馬県と接している。日本の女医第1号荻野吟子女史生誕の地であり、利根川の河川敷には、グライダーの滑空場がある。明治7年に創立された伝統ある学校であり、現在は児童数115名、7学級（特別支援学級1）の小規模校である。

本校の課題としては、小規模校のため人間関係が固定しがちであることと、学力向上についての意識が高くないことである。

3 研究のねらい

学校における人権教育の目標は、一人一人の児童生徒が発達段階に応じ、人権の意義・内容や重要性について理解し「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができるようになり、それが実践できることである。そこで、本校において人権教育を推進するため、ねらいを以下のように捉え研究を進めてきた。

- (1) 人権尊重の精神に立つ学校づくり
- (2) 人権教育の充実を目指した教育課程の編成
- (3) 人権尊重の理念に立った生徒指導

4 本校での取組

- (1) 人権尊重の精神に立つ学校づくり

① 人権が尊重される人間関係づくり

ア 縦割り活動の充実

本校では、クラス替えが無いため、毎年縦割り班の編成を行い、紅白を4チーム（ABCD）に分けて、運動会をはじめ学校行事や児童会活動を行っている。

（ア）縦割り遠足



葛和田の渡し船を利用して、春の遠足を縦割り班で行う。縦割り班で行う初めての行事で、高学年はリーダーとしての自覚をもつ。

（イ）縦割り清掃

縦割り班で清掃場所を決め、リーダー（6年）を中心に清掃を行う。リーダーは、清掃場所を決めたら、各学年の児童に割り振る。そして、6年生が中心となって、清掃と反省を行う。また、終わりの5分間を無言清掃の時間として取り組む。

（ウ）縦割り遊び

6年生の班長をリーダーとして、のびのびタイム（ロング昼休み）を利用し、縦割り班で遊ぶ。高学年は、低学年をうまくリードしながら仲よく遊ぶ。

イ 親切のクローバー



友だちから親切にしてくれたことや頑張っていることを互いにクローバーに書き、昇降口に掲示して認め合う活動を実施する。

② 人権が尊重される学習活動づくり

ア 自主学習の取組

家庭での学習を充実させるため、児童に自主学習を奨励し、自主学習帳を1冊終了すると、校長室で賞状を手渡し、自主学習の意欲付けを図る。

イ 道徳の授業の充実

道徳の時間を要として、一人一人を大切にする授業を実施する。

ウ モジュール学習と朝学習

熊谷市では、英語学習を充実させるため、毎朝10分間のモジュール学習を実施している。また、朝学習の時間を確保し、国語と算数の基礎基本を学習する。

③ 人権が尊重される環境づくり

ア 安心して過ごせる学校・教室

(ア) 3つの「あ」の徹底

「安心・あいさつ・後始末」を合言葉として、報告・連絡・相談の徹底を図っている。また、元気なあいさつと靴そろえ100%を掲げ全校で取り組んでいる。

(イ) 花いっぱい学校



計画的に花を植え、花の絶えない学校にする。また、学習広場(秦力フェ)を設置し、勉強を教え合ったり、読書したりする環境をつくる。

(ウ) ふわふわ言葉

各学級では、ふわふわ言葉を掲示し、子どもたちが積極的に使うよう働きかけている。

(2) 人権教育の充実を目指した教育課程の編成

① 地域の教育力を活用する

ア 秦っ子クラブ(放課後子供教室)、連絡協議会との連携

毎年、映画会・お泊り会、もちつき大会、6年生を送る会、ハイキング等で連携している。子どもたちはそれらの行事を楽しみにしている。

イ 小中連携の取組と補充学習

妻沼東中学校区で連携し、小中一貫した学習規律や生活規律の取組を行っている。

(ア) 中学生によるサマースクール、陸上練習



中学生がサマースクール(補充学習)に参加し、担任と一緒に学習指導を行う。また、陸上フェスティバルの練習を行う。

(イ) 秦ナビ(補充学習・夏休み中)の指導

学校応援団、地域の大学生、卒業生に協力していただき補充学習を実施している。

② 「体験的な活動」を取り入れる

ア 学校ファームの活用

農作物を育てることによって、食べ物の大切さや農家の仕事について学ぶことができる。また、給食の食材として利用し残食を少なくしている。

イ 「菊づくり」による一人一鉢



地域の方を指導者として、菊づくりを行い、一人一人が、菊を大切に育てる体験をする。作品は、聖天様の菊祭りに出品している。

③ 「生き方の学習」や進路指導

利根川の堤防工事にあたり、地元の企業と連携し、工事現場を見学したり、堤防工事について学んだりすることができた。働くことの素晴らしさや大変さを体験するよい機会となった。

(3) 人権尊重の理念に立った生徒指導

① 4つの実践と3減運動



生きる力を育むための土台として取り組む。全校朝会で意識づけを行うとともに、評価と確認をする。また、親への啓発を図り、アンケート

トを実施する。

② 秦小スタンダードの活用

妻沼東中学校区の4校で話し合い学習規律を統一し、秦小スタンダードを作成した。そして、このスタンダードを基本として生徒指導を進めている。

③ いじめ撲滅宣言

年2回(前期と後期)児童会を中心にいじめ撲滅宣言を実施し、いじめは絶対許さないことを確認する。

いじめが起きたときは、緊急職員会議を実施し全職員で対応にあたる。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

人権教育の推進にあたり、特別なことを特別にすることではなく、今取り組んでいることを見つめ直すことからスタートした。

そこで、校長として学校で取り組んでいる活動を柱としながら、ねらいに迫れるよう研究を進めてきた。その中で、小規模校としての特色を生かすとともに、地域や保護者に支えられ、それぞれの活動を通して他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、正義感や公正さを重んじる心等を育ててきた。今回の取組が、心結ぶ未来社会の構築につながるよう今後も人権教育の推進に努めていきたい。

(2) 今後の課題

それぞれの活動についての評価方法が明確でないので、取組の評価をしっかりとしていきたい。

また、職員も少人数のため取組がマンネリ化することもある。そこで、研修の機会を生かし、よりよい人権教育の推進の道筋を示していくことが、今後の課題である。

〔研究領域〕 II 教育課程

第6分科会 健やかな体

〔研究課題〕 健やかな体を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

〔視点〕

①たくましく生きるための体力を育む教育活動の推進

提案者 杉戸町立西小学校長 青 木 正

1 はじめに

グローバル化や情報化をはじめとした将来の予測が困難な複雑で変化の激しい社会の中で、社会の変化に向き合い適切に対応できる資質や能力を子供たちに確実に身に付けさせていくことが求められている。そのような中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力を育むとともに、子供たちの発達段階を考慮し、家庭との連携を図りながら、将来を通じて生活を送るための基礎を培うことが重要と考える。

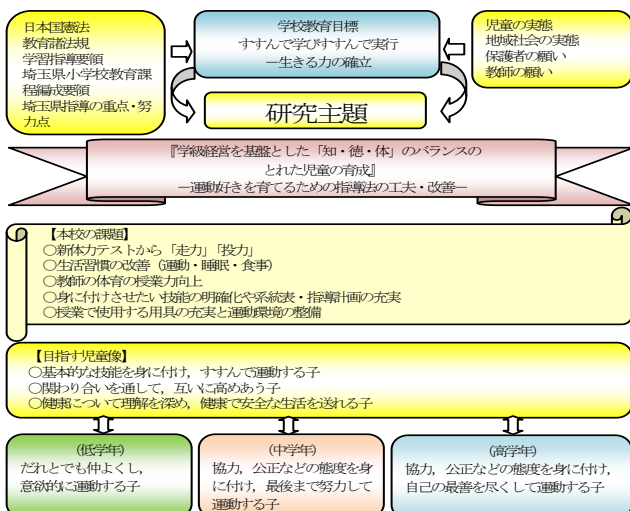
2 本校の概要

本校は、杉戸町北西部に位置し、緑豊かな西近隣公園が隣接している。また、杉戸高野台駅が昭和61年に開業し、団地・住宅が建ち並んでいる。一方、住宅地を取り囲むように田畑が広がる静かな環境である。児童数333名(H28.5.1現在)、通常学級12、特別支援学級1の学校である。家庭や地域の学校に対する関心は高く、「すすんで学び、すすんで実行」を学校教育目標に掲げるとともに、「勢いのある西小学校」「チーム西小学校」を合言葉に地域に根ざした学校をめざし教育活動を展開している。

平成26・27年度に埼玉県教育委員会より「体力課題解決研究指定校」及び平成27・28年度杉戸町教育委員会より「魅力ある授業づくり推進事業」委嘱校として、『学級経営を基盤とした「知・徳・体」のバランスのとれた児童の育成』－運動好きを育てるための指導法の工夫・改善－を研究主題として取り組んでいる。また、本校の健康教育の推進が評価され、平成26年度「健康教育推進学校最優秀校表彰」平成27年度全国学校保健教育推進校文部科学大臣表彰を受賞している。

3 実践の概要

(1) 研究の全体構想



(2) 研究の仮説と手立て

【仮説1】

指導内容を明確にし、児童一人一人を生かす場づくりや学習形態を工夫・改善すれば、運動の楽しさや喜びを味わわせることができるであろう。

【手立て】 体育授業の充実

- ①授業分析
- ②場づくり、学習形態の工夫
- ③身に付けさせたい技能の明確化
- ④系統表・指導計画の充実
- ⑤用具・資料の整備
- ⑥体育技能を補う体育教室

【仮説2】

かわり合いを重視した授業を展開すれば、運動の楽しさや喜びを味わわせることができるであろう。

【手立て】 体育授業の充実

- ①教師の声かけの分析
- ②作戦タイムや兄弟チームの工夫
- ③運動委員による体育教室の実施

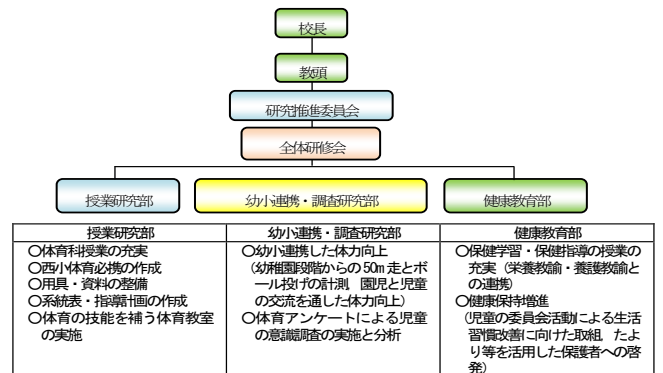
【仮説3】

健康の大切さを認識するとともに健康に良い生活のために、生活習慣の改善を図れば、健康で運動好きな児童を育成することができるであろう。

【手立て】

- ①保健学習・保健指導の充実
 - ②養護教諭・栄養教諭・外部指導者との連携
 - ③生活習慣の改善
- ・朝食 ・8時間以上の睡眠 ・60分以上の運動/日

(3) 研究の組織



(4) 各ブロックの取組

本校では、平成26・27年度埼玉県教育委員会の指定、平成27・28年度杉戸町教育委員会の委嘱を受け、体力向上とそれを支える自らの健康の保持増進をするための健康教育を推進している。特に、毎時間の体育の授業内容を充実させ、魅力ある授業を展開すれば、運動好きな児童が増え、体力も向上するであろうと考え、ブロック（低・中・高）ごとに授業実践を進め、全体研修を行っている。

(5) 各部の取組

① 授業研究部

ア 共通理解への取組

- ・西小体育必修の作成（ハンドサインや正しい姿勢、授業の目的に応じた集合や整



列の仕方を学校全体で統一、良い体育の条件、1時間の流し方、単元計画の仕方などを掲載)

イ 掲示物・板書の工夫

- ・ポイントを絞った掲示物の工夫・効果的な活用



- ・授業の流れの掲示
- ・写真、絵の活用
- ・体験学習による声当てクイズや掲示資料
- ・ワークシートの工夫

ウ 授業分析・フィードバック

- ・ビデオ撮影による授業改善
- ・期間記録と相互作用行動の分析
- ・十分な運動量の確保
- ・授業における場づくりの仕方
- ・声かけ分析

エ 授業づくり

- ・ゲストティーチャーの活用
- ・全教職員による体育実技伝達及び検討
- ・教育補助員の活用

オ システム表及び次年度への引き継ぎ

- ・全学年、全領域の指導計画書の作成

遊び箱の系統表					
第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
各学年で身につけたい能力 (1) ... (6) ...					
1. ... 2. ... 3. ...	4. ... 5. ... 6. ...	7. ... 8. ... 9. ...	10. ... 11. ... 12. ...	13. ... 14. ... 15. ...	16. ... 17. ... 18. ...

〔研究領域〕 II 教育課程

第6分科会 健やかな体

〔研究課題〕 健やかな体を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

〔視点〕

②主体的、実践的な能力や態度を育む健康教育の推進

提案者 春日部市立上沖小学校長 出井 宏 美

1 はじめに

学校における健康教育は、生涯にわたる健康づくりの出発点であり、その基礎を培う場である。心身共に健康に生きていくためには、運動・食事・休養にかかる基本的な生活習慣を身に付けるとともに、確かな知識と望ましい行動選択が必要である。

しかし、子どもたちを取り巻く健康に関する問題は、社会環境の変化により、ますます複雑化している。学校教育には、子どもたちが未来に夢を描き、潤いと活力のある生活を送るために、運動や健康の大切さについての意識を高め、主体的に実践する能力や態度を育むことができる教育課程を編成し、実施・評価・改善を図らなければならない。

そこで、主体的、実践的な能力や態度を育む健康教育の推進をする上での、校長として果たすべき役割を示し、自校の取組を述べる。

2 学校の概要

本校は昭和51年4月、粕壁小学校、武里小学校からの分離により小字「上沖の地」に開校し、本年度で41周年を迎える。敷地内にはたくさんの樹木が生い茂り、樹木の間をぬって全校児童が毎朝「林間マラソン」に励んでいる。図書ボランティア、花ボランティアおやじの会など、本校の教育環境整備のために、多くのボランティアの方々からご支援をいただくなど、地域との結び付きが強い学校である。現在、児童数は910名、教職員数50名の大規模校である。少子化にあたり児童数が減少している中で、本校は増加しており、うれしい次第である。



平成24年度、食育及び学校給食への取組に対して文部科学大臣表彰を、また、体力づくりや健やかな心と体の育成をめざした活動に対して、日本学校保健会から最優秀校の表彰を受けた。この受賞は学校内の取組のみならず、地域・保護者の方々との連携のたまものである。

これらを継承しつつ、本年度は、「かかわり合いの絆を深め、成長の喜びを地域とともに実感する魅力ある学校」と掲げ、児童のよりよい成長に全力を挙げて取り組んでいるところである。また、平成26～28年度、埼玉県教育委員会から「考え、話し合い、学び合う学習」推進事業の委嘱を受けており、21世紀を担う児童にたくましく生きる力を育むべく、研究に取り組んでいる。

3 研究の実践

校長として、健康教育を推進していくために、これまで取り組んでいる教育活動を点検し、児童の実態の把握とその課題を明確して、本校の子どもたちが主体的に健康について考え、取り組めるよう進めている。

そこで、次の視点で実践している。

- (1) 学校安全の視点から
- (2) 学校保健の視点から
- (3) 食育・学校給食の視点から

4 各視点における課題とその取組について

(1) 学校安全について

学校における安全教育は、日常生活全般における安全確保のために必要な事項を実践的に理解し、自他の生命尊重を基盤として、生涯を通じて安全な生活を送る基礎を培うことである。そこで、校長として常に語る「自分の命は自分で守る」を、子どもたち一人一人が確実に意識出来るよう取り組んでいる。

① 課題

- ア PTA 校外指導部との連携を図った通学路の安全点検の見直し
- イ 児童引き渡し訓練と小中合同避難訓練の見直し
- ウ 日常の交通安全指導の徹底

② その取組について

- ア 年2回（5・2月）

PTA 校外指導部と連絡協議会を実施している。3名の交通指導員と通学路を中心とした8地区でのPTA 部員さんと安全主任、生徒指導主任を交えた会



議をしている。通学路の具体的な危険箇所、児童の登下校の様子など把握し合い、対応策を見つけている。

- イ 震度5弱の地震が起きた場合は、学校に留め置きをし、保護者への引き渡しをすることとなっている。5月下旬に実施し、危険箇所の点検も含め保護者と下校している。

また、昨年度から防災の日（9／1）に中学生の出番（公助）を生かした小中合同の避難を実施している。中学校区（中2小4校）を中心とした実施であり、主体的な能力の向上を図っている。

- ウ 本校周辺の道路は、交通量が多く、ひやりとする事故が必ずある。事故防止の徹底を図るため、一斉下校だけでなく、学年下校、仲良し下校を随時実施し、注

意喚起を図っている。また、校舎内での右側歩行の徹底を生徒指導推進委員会と安全部が連携し、児童による啓発も実施し、安全に対する主体的な態度も育成している。

(2) 学校保健について

学校保健では、児童生徒等の健康の保持増進を図ること、集団教育としての学校教育活動に必要な健康や安全への配慮を行うこと、自己や他者の健康の保持増進を図ることができるような能力を育成している。そこで、体育主任・養護教諭・栄養教諭・保健主事が相互に連携を深め、以下の課題について取り組んでいる。

① 課題

- ア 新体力テストの結果の検証と体力の向上
- イ 保健学習の位置づけと保護者への啓発
- ウ 保健管理の充実

② その取組について

- ア 本校の過去3年間のデータを分析したところ、体格面では、男女とも埼玉県平均とほぼ同じ、運動面では、脚力（シャトルラン・50m）は、県平均より高い学年が多いものの、体の柔軟性や投力が劣っている。

〈児童の体力向上に向けて〉

- ・日本一周を目指した林間マラソンの実施
- ・学校保健委員会での体育委員会による保護者への啓発
- ・学年下校時前のシャトルランの実施
- ・伝達講習後の研修

イ 養護教諭を中心とした保健学習の推進

- ・いいはぴかぴか集会の実施
- ・全国歯磨き大会の参加
- ・おなか元気教室の実施
- ・薬物乱用防止教室の実施
- ・学校保健委員会と児童の保健委員会との連携

ウ 危機管理を意識した保健管理

- ・教職員のエピペン研修会の実施
- ・AED講習会の実施
- ・アレルギー研修会の実施



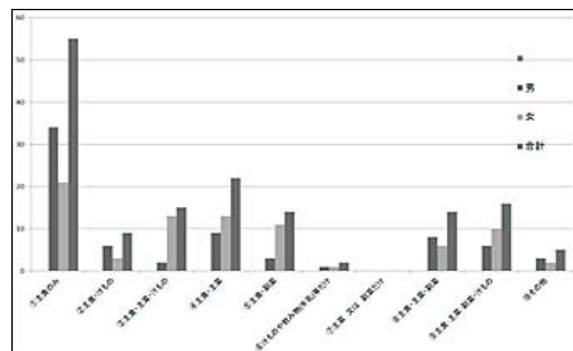
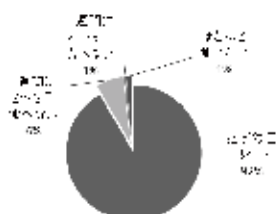
(3) 食育・学校給食について

① 課題

- ア 望ましい食習慣の定着
- イ 家庭における共食を通じた食育の推進
- ウ 農業体験等を通じた食への感謝の気持ちの醸成

② その取組について

- ア 下のグラフのように、9割以上の児童が朝食をしているが、朝食に目も向けず、家庭からの働きも弱い児童がいる。

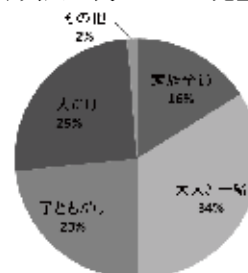


〈朝食100%を目指して〉

- ・早寝早起き朝ごはん運動の実施（給食委員会）
- ・元気もりもり集会の実施（給食委員会）
- ・ランチルーム会食の実施（全学年）
- ・生活科や道徳や特別活動時での栄養教諭による食育指導

- ・家庭科での調理実習指導
- ・体育の保健学習や理科の授業との位置づけ

イ 下のグラフのように朝食を誰と食べているか調査した。家族や大人と食べている児童が50%と少ない。



- ・親子料理教室の実施（夏休み）
- ・PTA ニュースやHP、学校便り等での保護者への発信
- ・給食試食会での保護者への啓発
- ・学校保健委員会での課題の共有と啓発
- ・学校評議員や学校応援団会議での試食会
- ・食との関連を図った骨密度調査

ウ 「食」に関する年間指導計画に位置づけた体験活動を実施し、主体的に食への意欲と感謝の醸成に取り組んでいる。

- ・3～6年生の系統性を図った総合的な学習の時間の実施（お米づくりを通して）
- ・さつまいもの栽培（1・2年）
- ・たけのこ狩り（給食委員会）
- ・そら豆のさやむき（2年）
- ・とうもろこしの皮むき（1年）
- ・グリーンピースのさやむき（3年）
- ・学校ファーム感謝集会の実施（収穫したお米の試食）

4 おわりに

私は、教職員が「知恵を出し合い、伝え合う」そして、何かを生み出して、課題に解決に向けて取り組むよう語っている。ひたすらに取り組む教職員を、校長としてリードし、主体的に自分の健康（体）を大切にできる児童の育成を図っていきたい。